



## 一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム  
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な  
地域を創出することをめざして活動します。

八雲志人館は「水の日」の八月一日、松江市八雲町を流れる意宇川のほとり、治水の偉人・周藤彌兵衛翁銅像周辺で、「水と火の祭」を開催しました。会場には神事のための祭壇、女性初のノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ブットナーの三体の像も設えられ、「水の神様、火の神様、そして先人に感謝し、平和を創る」という祭の趣旨を強く印象付けました。

## 「水と火の祭」開催



錦織明館長による紙芝居

の錦織明館長が自転車を引きいて登場。周藤彌兵衛、松江城物語の二本の紙芝居を上演しました。配られた水飴をなめるのも忘れて立ち尽くし、物語に引き込まれる子どもの姿も見られました。

午後四時に開場されると、参加者はふるまわれた抹茶で喉を潤し、かき水で火照った体を冷やしていました。  
四時四十五分、火の発祥の神社として知られる「出雲国一の宮」熊野大社の熊野高裕宮司による神事が執り行われました。  
神事の締めめの餅まきの後、樋野達夫さんによる古代の土笛演奏が、祭の開始を告げると、かんべの里

次は朗読の時間です。松江市文化協会が発行する情報誌「湖都松江」編集部が、小泉八雲没後百周年にちなんで企画し、全国から募集した「新作怪談」。その優秀作八編の一つに選ばれた「紅い傘」（原美代子作）を、小谷忠延さんが朗読しました。  
続いて、「私の八月十五日」と題し、地元八雲町の方によって戦争体験が語られました。戦争当時、海軍少年飛行兵、いわゆる予科練だった小早川富夫さん（八十七歳・八雲町東岩坂）、国民学校高等科二



小早川富夫さん

年生の時に自宅で終戦を迎えた須山和子さん（八十三歳・八雲町熊野・代読須山マツ子さん）、満蒙開拓青少年義勇隊の一員として、旧満州で終戦後の苛酷な逃避行を体験した石原茂さん（八十六歳・八雲町熊野・代読小松光子さん）の三名の方が、それぞれの体験を披露。「戦争法案」が国会で審議され、平和が脅かされるようとしている昨今の時代状況の中、生々しい戦争の実態と、「平和こそ真の幸福の礎です。二度と戦争のない社会を実現するために努力することが、生き残った私の使命」（石原さん）といった厳肅な言葉に触れて、会場は静まり返りました。

次は、木と木をこすり合わせる古代の方法による、火起こし体験が行われました。棒を両手ではさんで、もむように回して火を起す「もみぎり」、棒の下のほうに取り付けたはずみ車の回転力をうまく使って起こす「まいぎり」という二つの方法に親子で挑戦。木にうがたれた穴から煙が立ち上ると、拍手と歓声があふ

祭の最後に、小松電機産業株式会社・人間自然科学研究所の小松昭夫代表が、ブットナーの「武器を捨てよ」、「空の野蛮化」などの著作を中心とする功績と、像制作の経緯、作者のイングリッド・ロレマさんについて説明。八月十五日の「終戦」を、人類の戦争を終わらせるという、私たち日本人の役割を宣言する言葉にしようと提言をされました。



樋野達夫さん

午後七時、六基のかがり火が点火されました。火の粉が舞い上がり、彌兵衛翁像、ブットナー像が炎に照らされ、宵闇に浮かび上がると、樋野さんの笛が再び会場に響き渡りました。  
ある時には高く、大きく、ある時には小さく、優しく、また吹風に響き、「水の神様、火の神様、そして周藤彌兵衛翁にも届いたことでしょう」、司会者（北川美知子さん）がそう表現した見事な笛の音が大自然に染み入りました。

れました。

### ◆寄せられた感想

#### 広場全体が劇場型祭壇に

このたびは素晴らしい平和の祭典にご招待戴き、真に有難うございました。どの企画もレベルが高くて、よく考えられており、感心すること頻りでした。猛暑の中、お疲れが出ませんでしたでしょうか。

熊野大社の宮司さんによる神事から始まりましたが、確かに神が創った世界には核兵器などありませんでした。水と火をテーマに古代と現代を結びつける企画でしたが、現代に生きる我々の誤謬を「私の八月十五日」で強烈に示し、希望と勇気と知恵を四体の像で示すという「演出」は本当に素晴らしいかったです。

素晴らしい音楽や紙芝居もあり、広場全体が劇場型祭壇に変わりました。周りの山や川を含めると、まるで古代ギリシャやローマの円形劇場です。地にはかがり火、空には満月……。それらのまとめとしての、小松社長の「和の文化創設」スピーチも胸に響くものがありました。本当に忘れられない一日になりました。重ねて御礼申し上げますとともに、今後のご発展、ご活躍を大いに期待しております。

中村新一郎

### ◆後記

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。  
・第二回「水と火の祭」には、さらに多くの地域の方々にご参加いただけるように取り組んでまいります。  
・次号より、戦後七十周年記念企画「私の八月十五日」を連載します。